

パトロールグループ



里山の今

花だより

◆観察路の現状と

13年前の思い出 守口 京子

夏の終わりの観察路は山の中の至る所で雑草に覆われ、倒木につる草がからまり、行く手を阻まれる状態でした。どのグループも草刈りに大忙し。そのおかげで9月になると、ちょっとずつ歩きやすくなってきました。

先日の台風の後には枯れ木の倒木が何本か見られました。「ならやま自然の森」は、自然のまま見守り、観察路のみ整備する方針で活動してきたので、谷道周辺はナラ枯れの被害木がたくさん立ったまま残っています。それらが虫やキノコや微生物などに侵されやせ細り、強風に耐えきれずに順次倒れていきます。10mを超える高木が、周囲の樹木や藪笹をなぎ倒し、砕け散りながら、観察路ふさいで倒れている様子はすさまじいものです。倒れた瞬間はさぞかし大きな地響きがしたことでしょう。

草刈りをしながら13年前のことを思い出しました。今の第2駐車場のあたりだったか、参加者みんなで刈り払い機や鎌でササを刈り、チップパーで砕いていました。ビーンビーン、バリバリバリ。するとゴルフボールくらいの茶色の小動物(希少種)が出てきたのです。草で編んだかご状の巣も見つかりました。ご記憶の方もおられると思います。「せっかく良い所で平和に暮らしていたのに、人間は一体何してくれるんや！」と多分怒りながら逃げて行きました。かわいそうなことをしました。

自然を守るとか、自然と共生するとか、言うは易く、行うのは本当に難しいことと感じています。大事なことは必要なことだけする、不要なことはしないことだと思います。



谷道のボタンイボタケ

◆ススキ(薄・芒)

山本 美智子

尾花の名でも呼ばれ、中秋の名月には欠かせない秋の七草の一つ。詩歌、絵画に、子どもの戯れに、また枯れる様に美しい滅びの風情を味わったり、日本人には当たり前になじみの深い草です。日本全土、田園風景の中、山野のいたるところに生え、高さ1~2mの大型の多年草。茎は叢生して株をつくる。花は穂につき金色に、開花が終わる穂は銀色に輝く。変異の仲間に「ムラサキススキ」「イトススキ」、暖地の海岸には大型の「ハチジョウススキ」、観賞用に「タカノハススキ」が栽培されている。

かつて、ススキの茅は炭俵や一般の住宅の屋根を葺く材料に、また農耕用の家畜の飼料や田畑にすき込む肥料としても重用で身近な必需品であった。里山近くの低山や丘陵地にはススキの原が茅場と呼ばれ、村単位の共有地として大切に管理されていた。時代と共にその需要もなく茅場も不要となり、そのまま放置されたりスギやヒノキの植林地となり、またゴルフ場に開発されたりして、県内で現在残っているのは宇陀の曾爾高原のススキの原だけで、観光、ハイキング、自然観察、体験学習の場として、国立少年自然の家利用されている。コロナ禍の今年、和歌山の小石高原や曾爾高原への行楽は大変にぎわったと・・・。三密を避けるべく、のはずがという映像を最近目にした。美しいススキ草原の維持には定期的に伐採し、火入れして焼き払う等、人為的な管理が不可欠。自然にといえど、何もしないで放置すればススキの裸地は林から森へ数年で戻ってしまう。私たちのならやまの活動とも相通じる。曾爾高原では毎年、雪が消え、茅が乾いた三月下旬に山焼きが行われる。現代の若草山の一月の山焼きもしかり。ススキの穂を手折り、名月と共に楽しむ。そんな生活を大切にしたいと願いつつ、身近なススキに思いをはせました。